

阿岐のまほろば

Vol. 5

墨書土器を発見

にしもと 西本 6 号遺跡 (高屋町 大島～杵原)



墨書土器



墨書土器実測図

高屋町大島から杵原にかけての丘陵上に広がる西本 6 号遺跡は住宅団地造成工事に伴って 1992～1994 年にかけて調査を行いました。調査では飛鳥時代終わり頃の掘立柱建物跡と溝状遺構などが見つかかり、土器なども多く出土しました(本誌 Vol.3「古代の神殿跡を発掘」で報告しています)。この調査で出土した遺物を洗って、破片をつなげてゆく作業(整理作業といいます)を進めて行くうちに墨で文字が書かれた土器が見つかりました。それは須恵器と呼ばれる陶器で、高杯と呼ばれる脚のついたうつわです。このうつわの内側の底に 2 つの文字が書かれていました。このように墨で文字や記号を書いている土器を「墨書土器」といいます。西本 6 号遺跡からは文字を書くための道具の一つである、円い形をした硯(円面硯)が出土

していることは前回報告しましたが、今回は文字そのものが発見されたわけで、字の書ける人々がこの場所にいた可能性がさらに高くなりました。



西本 6 号遺跡位置図 (1:50,000)

墨書土器のようす

今回みつかった墨書土器の文字は線が太く、力強い書体で、墨の残り具合が大変良く、約1,300年前に書かれた文字とは思えないほどでした。1文字目の書かれてある位置から考えて2～3字のことばが書かれていたようです。さて、今回見つかった文字を読んでみると1文字目は「解」と書かれているようです。2文字目はへんとつくりがほんのわずかしが残っていないためはっきりと読むことができませんでした。そこでこのうつわが使われ、建物が営まれていた飛鳥時代の終わり頃に最も近く、その時期のさまざまな出来事が記録されている『日本書紀』などで「解」の字が使われる熟語を探してみると「解除」という文字がありました。そしてこの文字は「はらえ」と読まれていました。出土した墨書土器の2文字目をこまかく観察してみると「除」のくずし字によく似ています。このことから、このうつわには『日本書紀』にでてくる「解除」の文字が書かれていたのではないかと考えられます。

「解除」にはどんな意味が？

では「解除」と書かれ、「はらえ」と読んだ場合、文字にはどのような意味があり、何の目的に使われたのでしょうか。

これまでの研究によるとこの文字は人についた罪やけがれを「解き除く」儀式をさしているようです。その起源は古代の社会において罪を犯した人がその罪を許してもらい、償いをするために品物や財物を神様に差し出した神事からきています。これが天武天皇の時代になると国のあらゆる罪やけがれをはらい清めて秩序ある新しい国作りを行うことを宣言した「大解除(おおはらえ)」の儀式へと発展してゆくようです。この儀式は朝廷内で行われ、諸国の国造たちも協力した大掛りな儀式であったようです。もちろんこのような国を挙げた儀式とは別に、国造や民衆の間では罪やけがれ、病気、災いなどをはらい清めるための儀式が同じ作法に基づいて続けられていたようです。



さまざまなうつわ

どんな儀式が行われたのか？

飛鳥時代終わり頃の「解除」に関する記述には先に述べた『日本書紀』の天武天皇五年(676) 8月条に「四方に大解除をさせ、国ごとに国造は祓柱(はらえつもの) 馬一匹・布一常、郡司は刀一口・鹿皮一張(中略)各戸ごとに麻一条出させる」という文章があり、以後10年間に2例見られます。しかしいずれも「解除」ではなく「大解除」です。

では西本6号遺跡の土器に書き記されていた「解除」と考えられるこの文字はどんな儀式を指し、誰が執り行ったのでしょうか。可能性のひとつとして地元の有力な豪族が関係していることが考えられます。それは民衆には手の届かない金銅製馬具や立派な建物が見つまっていることから裏付けられるといえるでしょう。ひょっとすると三ッ城古墳を造った豪族の子孫たちが、けがれや災いをはらい清めるための儀式を行ったのかもしれませんが、儀式の内容や高杯に「解除」と書く意味についてはよくわからないため、今後とも研究を進めて行く必要があります。

このように今回見つかった墨書土器は古代の宗教儀式を考える上で貴重な資料であり、「古代の神殿跡」と考えられる西本6号遺跡の性格をより明らかにする手掛かりになると考えられます。

盆地を望むムラ

諏訪神社周辺遺跡 (西条町西条東)



諏訪神社周辺遺跡の作業風景

諏訪神社周辺遺跡は、西条町西条東に所在します。住宅建築に伴って、平成6年9月から11月まで発掘調査を実施しました。

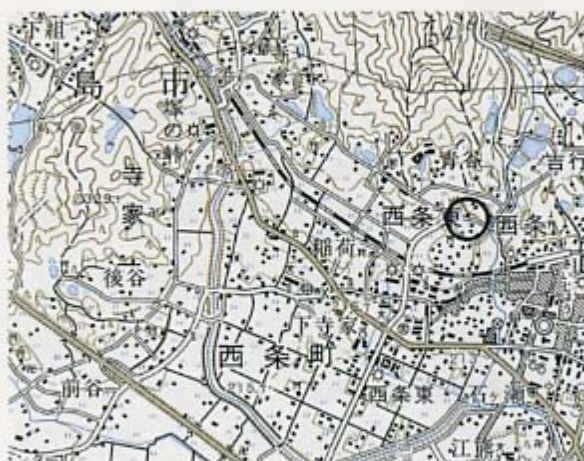
調査の結果、弥生時代の^{たてあな}竪穴住居跡、^{じゅうきょう}住居状遺構、^{ちようぞうけつ}貯蔵穴、^{みぞじょういこう}溝状遺構などが明らかになりました。なかでも、直径が最も大きい竪穴住居跡は、2回以上の建て替えが行われており、円形のものや六角形を意図したものもありました。

この他、貯蔵穴は壺等にいった穀物を保管していたと考えられますが、使われなくなった後はゴミ捨て穴になりました。住居状遺構は、倉庫や作業場として使われていた可能性があります。出土した遺物には、多量の弥生土器や土製品・石製品がありました。弥生土器には、煮炊きに用いられた鍋（甕）、貯蔵用の壺、料理を盛っていた食器類にあたる鉢・高杯などがあります。

土製品は、^{まがたま}勾玉と^{ぼうすいしゃ}紡錘車出土しています。政治的・呪術的な玉として生み出されたこの勾玉も、^{じやぶつ}稲作農耕にかかわるマツリに使用されていたのでしょ。諏訪神社周辺遺跡から出土した土製勾玉

は弥生時代後期後半頃と考えられ、広島県内では最も古い時代に属します。

出土した弥生土器などから、諏訪神社周辺遺跡は弥生時代中期後半から弥生時代後期の遺跡と考えられます。調査区域以外にも遺跡が広がる可能性があり、市内でも規模の大きなムラだったのでしょ。



諏訪神社周辺遺跡位置図 (1:50,000)

戦国城下の屋敷跡

いま だ
今田遺跡 (志和町志和堀)



今田遺跡の作業風景

今田遺跡は、志和町志和堀に存在します。県道改良工事に伴って、平成6年11月から平成7年1月まで発掘調査を実施しました。

調査の結果、戦国時代の掘建柱建物跡や土坑、溝状遺構などが明らかになりました。

掘建柱建物跡は長辺が4間、短辺が1間以上の規模のものから、3間×1間以上、2間×1間、1間×1間のものまでありました。

出土した遺物には、陶磁器や周辺で作られていたと考えられる土師質土器の他、市内の遺跡ではあまり例のない京都風の土器が多量に出土しました。これは、京都で使われていたお皿を真似て作られたものです。何に使われていたかは分かりませんが、京都にあこがれていた地方の文化人の生活の一端が伺われるものです。

この地域は、有力国人領主志和堀天野氏の本拠

☆発掘調査が終了に近づいたころには、遺跡の見学会を行っています。日時などについては広報東広島に掲載しますので、ご参加下さい。

☆諏訪神社周辺遺跡の見学会では、大勢の方々に来ていただきました。関心の高さを改めて感じています。今後ともよろしくお願いします。

地で、天野氏の本城金明山城跡をはじめとして、殿様屋敷と呼ばれる大規模な館跡や、天野氏の支城と伝えられる小規模な城跡が数多くあります。

今田遺跡も金明山城跡のすぐ麓にあることから、天野氏に関係した人々が生活していたのでしょう。



今田遺跡位置図 (1:50,000)

東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol.5

発行日 平成7年3月31日

編集・発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター

東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 0824-25-3880 〒739